社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2005年9月号

[3面]

特集

ケンペルの『日本誌』と石川流宣の世界地図

商学部教授 島田孝右

箱根の旧街道に聳え立つ杉並木の片隅に、観光客の注意をひくこともなく、ひっそりと佇んでいる小さな碑がある。将軍徳川綱吉の時代の1690年（元禄3年）に、長崎のオランダ商館に医師として赴任してきたドイツ人エンゲルベルト・ケンペル（1651－1716）を讃えて建てられたものである。彼が日本に滞在したのは、わずか2年間であったが、商館長のお供をして、1691年と1692年に江戸参府を経験する。長崎から江戸への往路、そして江戸から長崎への復路、険しい箱根の山を4度越えた旅人であった。

ケンペルの旅の記録は、彼の死後1727年に刊行された『日本誌』として結実した。本学生田図書館本館は、その初版本を所蔵している。フォリオ版サイズの2巻からなる豪華本である。この『日本誌』は、クルーゼンシュテルンの『世界周航記』（英語版、1813）、G・H・フォン・ラングスドルフの『世界周航記』（英語版、1813）、ティチングの『日本風俗図誌』（英語版、1822）、ビーチーの『太平洋・ベーリング海峡及び北極圏探検協力航海記』（1831）、ペリーの『日本遠征記』（1856）などで言及されている。このことは、鎖国下の日本に関する最大のインテリジェンスintelligence＝情報。この意味でintelligenceがイギリスで頻繁に使用されたのは19世紀の前半で、commercial intelligenceのように、military domestic foreignなどの言葉をつけて用いられた）源としての重要な役割を果たしたことを示している。

ケンペルの『日本誌』は、ドイツ語で書かれたが、大英博物館の創建者ハンス・スローン卿の依頼で若きスイス人ショイヒツァーが英訳して、ロンドンで出版された。ショイヒツァーによれば、ケンペルが帰国した際、持ち帰った品物の中に、日本人が製作した一枚の世界地図があった。大きさは、縦4フィート3インチ、横2フィートで、大英博物館に収蔵された。

この世界地図は、石川流宣が1688年（貞享5年）に製作した「万国総界図」であることがわかった。彼は江戸参府の折に、世界地図をみせてもらったと『日本誌』で述べているが、あるいはこの流宣の世界地図も、その時目にしたのかもしれない。「万国総界図」は、マテオ・リッチが製作し、1602年に刊行された「坤輿万国全図」に基づいている。

流宣の「万国総界図」は、イギリスでは『英国王立学院紀要』（1748、44号）や、『ジェントルマンズマガジン』（1749、19号）で紹介され、G・F・ミュラーの『アジアからアメリカへの航海』（英語版、1761）に、「ケンペルが持ち帰った日本の世界地図」として載せられている。これは、P・ブアシュBuache）が、「万国総界図」を基にして作った世界図をほとんど忠実に再現したものである。更に、W・ゴールドソンの『大西洋太平洋間の航路に関する観察』（1793）には、「ケンペルが日本滞在中に取得し、大英博物館に収蔵されている世界地図」という記述が見られる。このように、北東航路に大きな関心を抱いていたイギリス人は、この地図に大変興味を示したのである。果たして北極海を航行して東洋へ向かうことは可能であろうか。この疑問への答えをこの地図に求めたのであった。

（しまだ・たかう）研究分野は、日英交流史、18世紀英文学。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

ニュース専修 ウェブ版
2005年9月号
[3面]

図書館サービスから —

雑誌論文・記事を探すための便利なデータベース

図書館本館（生田）で端末を使って情報検索を行う学生

図書館では図書資料の他、データベースのサービス提供を行っています。図書館で利用契約しているオンライン（インターネット経由）のデータベースは、ほとんどが図書館本館、各分館の情報検索用端末と学内LANに接続された端末から利用することができます。図書館のホームページのメニューから「外部データベース」をクリックしてみてください。オンライン・データベースが一覧できます。

この中で、論文、レポート作成に欠かせないのが、『GeNii（ジーニイ）：NII学術コンテンツ・ポータル』の『CiNii（サイニイ）：論文情報ナビゲータ』と『MAGAZINEPLUS』という雑誌論文情報データベースです。これらのデータベースでは雑誌に掲載された論文・記事を、著者名や論文・記事のタイトル中のキーワードで検索することができます。

『CiNii』や『MAGAZINEPLUS』で見つけた論文が掲載されている雑誌が本学図書館に所蔵されていない場合は、カウンターに相談してみてください。図書館では他大学・他機関の所蔵を調査、雑誌論文・記事のコピーや図書の取り寄せ（有料）、他大学図書館利用のための紹介状発行などのレファレンス・サービスを行っています。その他、図書館利用の様々な質問を受け付けていますので、気軽に利用してください。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.

社会知性の開発をめざす 専修大学

ニュース専修 ウェブ版

2005年9月号

[3面]

≪専修人の新しい本≫

「Faist et imaginaires de la guerre russo-japonaise」
塚本利明 著

邦訳すれば『日露戦争における事実と想像』。エキソティスム叢書第二シリーズ第五巻に当たる。フランスでは今年が日露戦争百年という意識も強く、日本海海戦の大勝利が第二次世界大戦の敗北につながったという見方もある。

本書は、二十世紀初頭におけるこの世界史的大事件を中心に、仏・ツールーズ大学サヴェリ教授がさまざまな視点から書かれた論文二十八編を編集したもの。日本人寄稿者は七名、本学では塚本利明名誉教授の「漱石と日露戦争」。(Le Torii Editions/ISSN1148-3202/BP 93-86003 poitiers cedex)

寄稿者(つかもと・としあき)＝専修大学名誉教授。

「カントと二つの視点 ―『三批判書』を中心に」
菊池健三 著

哲学、倫理学、法学、美学、目的論等の広範囲にわたるカントの体系的研究全体の骨格を、いわゆる「三批判書」を中心に、出来る限り簡潔に解明しようと試みているが、しかし単なる解説書ではない。初期では「美」は女性の、「崇高」は男性の性的性格として明確に割り当てられていたのに対し、後になって何故このような性的性格が消失してしまったのかという点を手掛かりに、カントの論考を生涯貫いていた「哲学者」と「観察者」という二つの視点が、体系を完結する試みにおいて最終的に「交差」していたのでないかという大きな問題を提起している。(専大出版局・本体1143円＋税)

著者(きくち・けんぞう)＝経済学部教授。担当は芸術学。

「選ばれる学校・選ばれない学校」
嶺井正也、中川登志男 編著

本書は、徐々に広がりつつある公立小中学校の学校選択制の実態を東京都の品川区や豊島区など、埼玉県三郷市、広島県尾道市などを例にとり分析したもの。結論として、選ばれる学校と選ばれない学校とが固定化する傾向にあることなど興味深い指摘がなされている。過去のデータを時系列的にグラフ化するという非常に素朴な調査ではあるが、それだけに説得力のある分析になっている。学生、卒業生も執筆陣に加わっている本書を是非読んでいただきたい。(八月書館・本体1200円＋税)

編著者(みねい・まさや)＝経営学部教授、(なかがわ・としお)＝法学研究科修士課程在学。

「タイプAの行動とスピリチュアリティ」
大石和男 著

なぜすぐにイライラしてしまうのか。家族のために働いてきたのに、なぜ家族は自分を避けるのか。このような疑問に一つの答えを提示するのがタイプAである。タイプAは、競争心が強く負けず嫌いで、いつも何かをしていないと落ち着かない、ストレスを生み出しやすい生き方である。

タイプAは、効率重視の社会や家庭環境から生まれるが、最も注意すべきは物質主義に偏った価値観であるという。タイプAの修正のために、著者は目に見えないスピリチュアルな価値観の重要性を説く。生き急ぐあまり大切なことを忘れがちな、忙しい人達にこそ読んでもらいたい書である。(専大出版局・本体2400円＋税)

著者(おおいし・かずお)＝商学部教授。担当は健康科学論、体育演習。

「コミュニティ・ビジネス ＜専修大学商学研究所叢書4＞」
神原理 著

近年の日本では、地域住民のボランタリー活動にもとづきながら、高齢者の生活支援や子育て支援、商店街の活性化や環境保護など、地域の様々な生活問題に取り組む事業活動が盛んになりつつある。本書では、こうした「コミュニティ・ビジネス」が発展していくための課題（諸条件）について、経済、経営、地域ネットワーク、サービスとマーケティングといった様々な視点から論じられている。

本書はコミュニティ・ビジネスの関係者だけでなく、地域経済に関心の高い研究者や学生にも適した基礎的文献といえる。（白桃書房・本体2000円＋税）

編著者（かんばら・さとし）＝商学部助教授。担当は商品学。

「『ツァラトゥストラ』入門」
小山修一 著

わけの分からない本だとされてきたニーチェの代表作『ツァラトゥストラ』を、これほど分かりやすく説明した本は他にない。日本ではハイデッガーを中心とする哲学的アプローチが今なお主流のようであるが、詩人でもある筆者は百回以上原典を読み返して独自の詩学的地平を切り拓いた。その過程において評価の高い詩的翻訳書をも世に出している。読者自身をも謎とかるべき象徴とし、読書を視界を得るための登山にたとえているところなど、本書は入門書としてのみならず、ギリシャ神話を踏まえた文学理論書としても極めて興味深い。（郁文堂・本体2100円＋税）

著者（こやま・しゅういち、ペンネーム・おやま）＝石巻専修大学経営学部助教授。担当はドイツ語。

Copyright(C) 2007 SENSHU UNIVERSITY All Rights Reserved.